

も少しもおかしくないのである。『松操和歌集』は、彼によって最後の斧正がなされたと言えようか。

(注一) 垂城史談会蔵本と玉里文庫本とで歌数に差があることによる。現在、筆者は、垂城史談会蔵本が原形を残していると考えているので、四十七首収められていたと考える。

(注二) 問題はあるが、地域研究所叢書『松操和歌集 本文と研究』(昭和五年三月)に従って、玉里文庫本を底本とし、垂城史談会蔵本の校異を本文の右に小字で記した(×印は、その文字のないことを示す)。

(注三) 地域研究所叢書の「解説」では、垂城史談会蔵本を「いまだ撰歌過程にある一時点の形態をとどめた写本」、玉里文庫本を「更に整理されたもの」と推定した。

(注四) 玉里文庫本には詞書、和歌ともにならない。

(注五) 『盛香集』は玉里文庫本によった。

(注六) 『称名墓志』も玉里文庫本によった。

資料の便宜をはかっていた鹿児島大学附属図書館、大口市ふれあいセンターの方々、取り分け資料を紹介していただいた専門指導員の永井利實氏にあつく御礼を申し上げる。

(橋口晋作)

と出ている。「酉年」というのは宝暦三年であろうか。この和歌の第五句は「からまし物を」に添削されている。『松操和歌集』は、この添削された形を収めている。猶、垂城史談会蔵本は、この辺りの歌題に「を」を加えている。

これも誰かに添削して貰っている「詠梅五十首和歌」に、41番の和歌が、

戸外梅

春風に外面の梅の薫る夜は槓の板戸をさゝてねなまし

と出ている。この歌には可とする線が引かれ、又、特に添削された箇所もない。篤実は、下の句を「いた戸もさゝすねにけり」に改めて、収めている。「いた戸も」と他の物を匂わせた表現、「ねにけり」と事実にしたことも共に成程と感ぜさせる。41番の和歌の題では、玉里文庫本が「を」を加えている。歌題に「を」を付けるかどうかということは、どちらの本も統一がとれていない。

右が筆者の知っている『松操和歌集』以前の歌形等との比較である。久品の和歌で、『松操和歌集』以前の資料を見つけ得ていないのは、836番、1126番、1127番、1128番の四首である。1126番、1127番、1128番の和歌は、同じ資料にあるのではないかと思われる。

管見では、久品は多くの歌稿を残しているが、それは延享二年頃から亡くなる宝暦四年までの十年間のものようである。久品三十歳頃からのものと見做せようか。彼は盛んに和歌を作っているが、それを百首に纏め、又よく添削して貰っている。添削者として分かっているのは、中馬諸香と寺山用央である。寺山用央は、『松操和歌集』

に十六首とられているが、中馬諸香は久品よりも少ない九首である。ともあれ、諸香や用央は優れた和歌の先達として、久品に認められていたのであろう。とすれば、十八世紀半ばの島津藩は、このように和歌を添削する専門歌人がい、それに習って和歌を作る久品のような人がいた、和歌の盛んな土地、時代だったのかもしれない。

まとめに代えて

右のように筆者は、今回の調査で忠元、忠増、久品の『松操和歌集』以前の歌稿を探し、比較考察することが出来た。

『松操和歌集』は、やはり、原歌稿よりも『盛香集』や『称名墓志』といった後代の編纂物を材料としているようだが、紀行文等の原資料に取材していることも多いようである。又、久品には、添削を入れて編んだ私家集（選集）のようなものがありはしなかったかとも思われる。

『松操和歌集』の詞書は、篤実がそれらの資料を読んで記したもののようだが、和歌そのものから詞書を作っている場合もかなりありそうである。又、『松操和歌集』に収めるに当たって、篤実は、相当に原歌を添削している。その添削のあとを見ると、成程と首肯出来るものが大半である。「いはけなきより和歌を好み 道にこゝろさ」して来た篤実が、古典和歌の表現に精通していたことは間違いない。「材質の庸下にてよしあしも分ぬ」と卑下しているが、和歌において自他に共に許すものをもっていたに違いない。

玉里文庫本を写した島津久光も又『松操和歌集』に手を入れている。博覧強記の久光が歌集や和歌について自負するところがあつたとして

行文が『大口旅行記』である。この旅行記中、小苗代原の薬師に参詣した所に、761番の和歌が次のように出ている。

忠元此堂に徘徊せられけるを 敵ともすゝろに打出て戦ふ 忠元
もみつから余多の敵を打なひけ かつ手負 名を顕はせし所なり
しか 今は杉の木立物ふかく 野辺は小笹の生しけりて する人
まれに成行を 猶分入て 老たる者ともにとひ語らへは 心もむ
かしに成行て 唯涙のみ先たちたり

今はわか涙そさそふそのむかし旗手なひけし野への春風

篤実は、この部分の大意を纏めて詞書とし、和歌の二、三句「涙そさそふそのむかし」を「袖に涙をさそふかな」と改めている。

翌四年、大守島津重年は初めて帰国した。久品は、伊集院で重年を接待した。この時の紀行文に、834番、835番の和歌が、次のように出ている。

伊集院の麓につきければ 役人ら余多出むかひ 我為にたて置た
るかりの茅屋に請して あるし儲す 時におもひつゝけ侍ける
こゝろある此さと人のもてなしも思えは君の恵みなりけり
(中 略)

次の日 夕立のはけしく降来ければ

所からいと、はけしく夕立の雨さそひくる山風の音
今宵も雨のふりければ 旅宿雨と云事を

きけは猶袖こそぬるれ夜の雨ふる里忍ふ草のまくらに

篤実は、例によって簡潔に纏めて詞書としているのだが、どのような「御供」であったかは、明らかになっていない。又、835番の詞書は、玉里文庫本の「旅宿に」のある方が、資料に近い。834番の和歌の第二

句「此さと人の」を篤実は「やとのあるしの」に改めているが、紀行文によれば、個人の接待が特に意識されている訳ではない。

表紙等が散逸しているが、久品の私家集稿に、製作年を記しとどめているものがある。それに、733番の和歌が、

美代清相大口に旅行の時 忠元の墓に詣しとて かくよみて
送られける^{元宝}

埋ぬ名をのこしをく武士のあはれむかしをしのふあと哉

よ、を経て終にくちせぬ其名のみ残るしるしの松そ木高き

返し

なき玉もさそなうれしと思ふへきかゝる言葉の花の手向を

心ある人にとはれし草のはらおもひやるにも袖そしほる、

のように収められている。「宝元」は宝暦元(一七五二)年であろう。この私家集稿によれば、清相と久品は二首の和歌の贈答をしたのである。二首のうち最初の和歌が取られているが、選歌されたの上である。篤実は、客観化して733番の詞書を記しているが、「是を聞て返し」という表現は、清相から歌を贈られて返歌したという事情と微妙に異なる意味もあろう。和歌も、「さそな」を「さこそ」に、「思ふへき」を「思ふらめ」に、「手向を」を「手向に」にと改めている。篤実が「へき」を「らめ」に改めたのも穏当と言えよう。猶、久光が「うれしと」を「うれしく」に改めているが、これも成程と感ぜられる。

久品が誰かに添削して貰っている「酉年百首」に、998番の和歌が

寄海恋

恋わたるかひもありその海ならはみるめをたにもしはしからはや

761 今是我袖に涙をさそふかなはたてなひけし野への春風

御供伊十院へ御供にてにて伊集院へまかりける折 所の人さまくにもて
なしければ

834 心有やとのあるしのもてなしもおもへは君の恵なりけり

旅宿×××に雨の降ける夜

835 きけはなを袖こそぬるれ夜の雨の故郷しのふ草の枕に

備後国鞆の浦にて巖根に生たる松を見て

836 たねしあれは白浪かゝる岩ほにもいく世そなれてとももの浦松

925 今はよも人のつらさになからへしあふを限りとたのむ命も

寄海恋

998 恋わたるかひもありその海ならはみるめをたにもからまし物を

無常の心を

1125 としくになきは数そふ世。中の哀をよそにいつまでかみん

去年の春より御かたはらにめしつかはれ そのとしのあ
き当務に任せられ くれ竹の世々の直すなをなる御あらましを

も 度々仰給ひけるに はや昔かたりとなり給ふことの

悲しさいはん方なく 月の十日 喪を国にふれ給ひしに

とひくる人涙はかりに物いはず侍けれは

1126 くる人もおなし心に物いはず涙先立あきの夕くれ

おなしとしの葉月ハ十五夜 月を見て

1127 秋にすむ月は昔の月なれと我身はもとの身にしやはある

明る年の六月四日より御一周忌のみわさなとおこなはせ
給ふと聞きに としくにうとくなり給はん事の悲しくて

1128 なき玉も帰るとならは別にしその日を今日と待もしてまし

の十四首である。これらの和歌も、管見で知り得た資料の成立年順に見て行きたい。

455番の和歌は、延享二（一七四五）年十一月十六日に、中馬源兵衛諸香が「点削」した「百首歌」に出ている。但し、久品の原歌は、

野月

百草も露を結てくる、野に澄上る月の影そ移らふ

とある。これを諸香が添削して、

露結ふ野への千種の花の上くるれば月の影そ移らふ

と直した。篤実は、諸香の添削を受け入れた上で、第三句「花の上」を「色くく」と改めて、選り入れたのである。

寛延三（一七五〇）年に寺山太郎右衛門用央に斧正を請うた「詠百

首和歌」には、405番、925番、1125番の和歌が、次のように収められている。

鹿

きく人の涙をさそふつまならん尾上のしかの夕くれのこゑ

不逢恋

今はよも人のつらさになからへしあふをかきりと頼むいのちも

無常

年々になきは数そふ世中をあはれと余所にいつまでかみむ

用央は、これらの中、1125番の和歌の「世中をあはれと」を「世中のあはれを」と添削している。篤実は、用央の添削を受け入れた上で、右三首を選り入れている。

寛延三年三月に久品は、忠元の墓参に大口に往復した。その時の紀

忠元の和歌で、『松操和歌集』以前の資料を見つけないのは、720番、859番、870番、1032番の和歌である。870番の高原神徳院での看淳法印との贈答の和歌は、『新納忠元勲功記』には出て来るが、これは『松操和歌集』よりも新しい。

弥太右衛門忠増

『松操和歌集』に収められている忠増の和歌は、

朝鮮国の軍に渡るとてさくら河となんいふ所あり花のちり
かふをみて

769 ちりてたに忘れぬ春や桜川いはせにかゝる花のしからみの一首である。

この和歌は『忠増渡海日記』の文祿元（一五九二）年三月六日、水俣市久木野古里から芦北郡湯ノ浦町に越える途中に、

ちやうしやうといへる坂をのほり のほりはつれば やかて桜川
といいて ちいさき山川の有けるをわたるに

散てたに春を忘れぬさくら川岩瀬にかかる花のしからみ
となむ口すさみて 谷みね野山のかすを越て行は

と記されている。『忠増渡海日記』の中でこの桜川の和歌は目にとまるものであったようで、『称名墓志』に

忠増朝鮮渡海の日記あり 世に行はる 爰に其略を摘載す

桜川といひてちいさき山川のありけるを渡に

散てたに春を忘れぬ桜川岩瀬にかゝる花のしからみ

と記されている。『称名墓志』のこの桜川の和歌の詞書・和歌は、『忠増渡海日記』をそのまま抜き出し、僅かに送り仮名や仮名遣いなどを改めたものに過ぎない。これに比べると、『松操和歌集』は、詞書は

資料の表現を離れて編者の書いたものであり、和歌も第二句が改められている。第二句の「春を忘れぬ」を「忘れぬ春や」に改めたのも篤実であろうが、表現を凝縮して畳みかける手法は、なる程と感心させられる。詞書の冒頭部分は日記の背景を簡潔に述べたものであるが、「花のちりかふをみて」は和歌の内容から記述されたものであろう。その点から見ると、「ちりうかふ」とある垂水史談会蔵本が本来的で、玉里文庫本は「う」の脱落でなければ、状況を相当に改めている（「にて」を「あり」に改めている点から見れば、久光が「ちりかふ」とした可能性が大きい）。

内蔵久品

『松操和歌集』に収められている久品の和歌は、

戸外梅を

41 春風に外面の梅のかほる夜は楨のいた戸もさゝすねにけり

405 聞人の涙をさそふ妻ならん尾上の鹿の夕くれの声

野月

455 露結ふ野への千くさの色くにくるれば月の影そ移ふ

大口といふ所にまかりて新納忠元のしるしに水を手向ると
て

美代六郎兵衛清相

埋れぬ名を残しをくもの、ふのあはれ昔をしのふ古塚

忠元の末孫内蔵久品是を聞て 返し

733 なき玉もさこそうれしく思ふらめかゝること葉の花の手向に

先祖忠元の軍し給ひし野禮にまかりて 涙のこほれければ

「形見の桜」を踏まえている（久光の編著した『庄内陣記』の「財部合戦之事」には「平田吉田ノ事実」は記されていない）。『松操和歌集』の詞書は、詠歌の背景を簡潔に纏めたものであるが、「若武者」としたのは、平田三五郎、富山次十郎説のいずれにも組みしなかつたということであろうか。

『松操和歌集』の完成より二十六年前の文化十一（一八一四）年八月に、本田親孚が編選した『称名墓志』の忠元の条には、101番、202番、311番、1307番、1270番、の和歌が、

慶長十五年の暮春

さそな春つれなき老とおもふらむことしも花のあとに残れは

杜更衣

今朝みればこれもかへきや若葉そふ花はきのふの衣手のもり

松蔭新涼

すみ吉や西にあき風松ふけはす、しさよするおきつ白波

月前郭公

時鳥イ有明雲間の月のひと声におもかけきゆる花も紅葉も

題しらす

さまざまの陰に影と頼めは伏ておもひおきても君を先緒いのるかな

と記されている。この『称名墓志』の所載歌も全て『松操和歌集』に選びいれられている。

101番の和歌は、四十四年前の『盛香集』にも収められていたが、辞世歌である旨はどこにも記されていない。しかし、慶長十五年の暮春という特定の時期を詞書としたところには、忠元死去が意識されているようにも見える。但し、「暮春」は、和歌から来た詞書で、

本田親孚の作文である（十二月三日死去と久光は記している）。和歌も「ことしも」「残れは」と、忠元が桜の花の後に生き延びていることを示す表現に改められている（「残りて」という書き込みは、『松操和歌集』の表現の、久光の校合と見られる）。『松操和歌集』の詞書は、101番の和歌の内容に基づく篤実の全くの作文である。「数多よみ侍ける」などと、「花の歌」として鑑賞すべきことを協調している。これは、『盛香集』の表現を進めたもので、和歌の「残れは」から「残りて」への改作も、その線上で行われている。

202番の和歌は、『幽斎添削詠歌』の詞書「更衣」に「杜」が加えられ、初句の「けふ」も「今朝」に改められている。この改訂も親孚が行ったのであろうか。『松操和歌集』は、『称名墓志』によっている。猶、鳥津久光は、第三句を「若葉さす」という強い表現に改めている。

311番の和歌は、近衛信輔の都城での歌会で詠んだ和歌であり、『松操和歌集』玉里文庫本の詞書（歌題）が「松樹」となっている理由は詳にしない（久光が改めたものではないかと思っているが）。

1307番の和歌は、「雲間の」が『松操和歌集』では「あり明の」に改められている。これは、「月前」という題意に沿って改めたもので、篤実が行ったものであろう。

1270番の和歌の、「さまざまに影と」から「さまざまの陰と」へ、「先いのるかな」から「猶祈る也」への『松操和歌集』の改作も篤実が行ったものであろう。いずれも表現が強くなっている。「先」から「猶」へ改めることによって、「ふして」「おきて」が繰り返しから、対比へと変貌させられている。

右が筆者の知っている『松操和歌集』以前の歌形等との比較である。

拙斎慶長十八年八月十三歳身終ル
十五年十二月三日八十五歳ニテ
死去ト一本ニ見ユ

辞世に

さぞな春つれなき老とおもふらんことしは花の跡に残して

(中 略)

新納武蔵入道拙斎も年長よはひかたふきて 漸く御船元迄見送り
奉りて

あぢきなや唐土迄もおくれじとおもひし事もむかし成けり

右の歌を清水宗川まさきのかつらには鳥津修理太夫義久朝鮮渡海
の時と載たり

惟新主武蔵江御返歌

唐土ややまとを掛けて心のみかよふ思ひぞ深きとはしる

(中 略)

其時平田三五郎生年十五才に而戦死 彼は無双の美童也 武蔵入
道哀傷して

きのふまで誰か手枕に乱れけんよもぎがもとにかゝる黒髪

(「平田三五郎」に△を付し、上欄に「△富山次十郎ナリト云説
アリ」とある)

と記されている。

『盛香集』は、明和七(一七七〇)年春に源惟盛香が子息盛容に清
書させて成ったものである。この『盛香集』に収められた忠元の和歌
は全て『松操和歌集』に採られている。

1032番の詞書は、忠元の和歌だけを採用することになったので、篤実
が忠元の立場で詠歌の次第を纏めたものであろうか。和歌そのものも
「きへぬる」を「消にし」へ、「いともかしこき君か」を「かゝる恵
の露の」へと、大幅に改められている。「消にし」へ改めたのは死去

の意を明確にする為であろうし、「かしこき」という「うらやまし」
に並びそうな情意表現を除いて、「消」「かゝる」「露」「葉」という縁
語で繋いだのも巧みと評してよいであろう。

101番の和歌では、詞書の違いに驚かされる。『盛香集』は、忠元の
辞世歌(慶長十八年八十三歳説の)として紹介していたのである。「こ
としは」「残して」という表現は、辞世の意をこめたものであろう(「花
の跡に」は分かりにくい表現となっている)。

718番の和歌は、前出『大島久左衛門忠泰高麗道記』に出ていたもの
である。「年長よはひかたふきて 漸く御船元迄見送り奉りて」とい
う文は「高麗道記」(1032番の前)の表現から書けないことではないと
思われる。『盛香集』で、この和歌は忠元のものとして明記され、第四句
も「おもひし事も」と『松操和歌集』の表現に変わっている。『松操
和歌集』の詞書は、和歌の内容から逆に書かれたものではなからうか。
「高麗道記」によれば1203番の和歌と同じ場で作られているのであるが、
それが「高麗へ」、これが「もろこしに」と書き分けられたのはどうだっ
たか。和歌の表現がそうになっていると言えればそれまでだが、「高麗道記」
では同じ時の作と分かるが、『松操和歌集』では別の時と見てしま
うのではないか。『盛香集』の詞書が、『松操和歌集』の1203番の詞書に使
われているようにも見えることからすれば、篤実は、同じ時の作と知っ
ていながら、別の時のように詞書を変えたとも取れる。玉里文庫本と
垂城史談会蔵本との表現の違いは、ここでは前者の方が『盛香集』の
表現に一致する。

1098番の和歌の『盛香集』の詞書は、二巻本『庄内軍記』の「平田三
五郎戦死之事」との関わりの深さを感じさせる。欄外の書き込みは、
玉里文庫本の筆者、鳥津久光(源忠教)のもので、これは薩摩琵琶歌

詠松蔭新涼和歌

沙弥為舟

すみよしや西に秋風松吹は涼しさよするおきつ白波

とある。『松操和歌集』の詞書に一部異同があるが、やはり垂城史談会蔵本が資料の表現に基づいている。

1203番と718番の和歌は、『大鳥久左衛門忠泰高麗道記』の慶長二（一五九七）年二月条に

廿日ほとは隈の城と申所へ 義弘船待し給ふに みやつかへ
つ、かの地へ逗留つかまつりける その所にて新納武蔵入道七
そちにあまり給ふ人になんおはしけるか

今こんと別れ行とも七そちのよはひの名残おもひやらなん
かやうによみておくらせ給ふ

（中略）

又有人の君へ申奉り給ふ

あちきなやもろこしまてもおくれしとおもふ心は昔なりけ
り

その御返しに

もろこしや大和をかけて心のみかよおもひそふかきとは
しる

と記されている。1203番が「雑歌」に、718番が「羈旅歌」にと部を異にして収められているが、これは、718番が鳥津義弘の答歌と共に収められたことによるのであろう（軍旅の別れという気分が出ている）。

1203番の和歌の詞書は、後記『盛香集』の718番の和歌の詞書を参考にして見られる。又、この「高麗道記」によれば、忠元が贈ったのは久左衛門忠泰だったように見えるが、『松操和歌集』の詞書

ではそのあたりはどうなのか、気になる。

718番の和歌は、この「高麗道記」では「有人」の作となっているので、同時期の資料で作者を確認する必要があると思われる（後述の『盛香集』にこの和歌は忠元のものとして出て来るが、忠元の文事は伝説化して行く傾向もあるので）。猶、「高麗道記」では第四句が「おもふ心は」となっている。

右が、今回管見の及んだ同時代の資料である。次に挙げるものは、それから三百年前後も後の、『松操和歌集』の資料である。

1032番の和歌は、『盛香集』^{（注五）}に、

夏のはしめつかたより病床に臥て 水無月十四日身まかりぬると
聞て 一首をつらねて手向とするものになん

はちす葉のおきこほしたる露の玉終やきみかたために捨けん

六月廿九奠

法印龍伯

是を聞て新納武蔵守忠元

うらやましきへぬる玉のおはりまていともかしこき君かこと
の葉

とある。『旧記』の中には、同じ資料を写して説明を加えたものもあるが、その引用部は、漢字仮名の違いの外、「病の床」「不便さのあまり一首を」「ものになん爾 法印龍伯」「露の玉の」「慶長十四年六月廿九日眞」「新納武蔵歌に」（「法印龍伯」の置かれ方が異なり、「是を聞て」が無い）の異同もある。

『盛香集』には、この1032番の和歌から相当離れた箇所に、忠元の和歌に関する逸話が纏められている。その中に、101番、718番、1098番の和歌が、

御祓のみ夏をのこして楸おふるきよき河原はあきかせそ吹

早秋

草も木もけふより秋の立田姫こゝろの色や染んとすらむ

山月

いつるよりあらしを空に伴ひて雲にはなるゝ山の端の月

九月尽

草の葉のはかな^き露を形見ともおもひをきてや秋はいぬらん

初冬

江の南さなから春の朝なきに花のなみよる神無月かな

時雨

晴くもるひかりは空にさたまらて夕日をわたるむら時雨かな

逢恋

暁のゆふつけとりも心あれなとけてぬる夜にあふさかの山

と清書されていた。細川幽齋は、550番「時雨」の和歌を「長」として

二本線を引き、残りの和歌も可とする墨を付けている。

3番の和歌の第五句は幽齋によって「瀧津河波」と改められている。

その理由について、幽齋は「瀧は氷らぬ物と申ならはし候」と記して

いる。『松操和歌集』は、幽齋の斧正を受け入れた上で、「春のしるし

には」を「今朝の春風に」と改めて、滝の水が春のしるしであること

を明確化している。玉里文庫本で「河波」を「岩浪」に改めたのは激

しさを出そうとしたのであろうか。

96番の和歌は、詞書の「盛花」が『松操和歌集』では「花盛」に改

められている。この辺り玉里文庫本では歌題に「を」が統一して付け

られている。

202番の和歌は、詞書が「更衣」、初句は「けふみれば」、三句も「若

葉そふ」となっている。この和歌には「めつらしき更衣候 殊勝々々」という幽齋の評がある。猶、この和歌は、後記の『称名墓志』で改訂されることになる。

323番の和歌の「河原は」を幽齋は「河原に」に改めている。その理由として、幽齋は「にと候てもはの心たしかにきこえ候」と記す。『松操和歌集』は幽齋の添削に従っている。

341番の和歌の「けふ」を玉里文庫本が「今朝」に改めたのは、時間をより限定しようとしたものである。

450番の和歌には、「雲にはなるゝあたしき物候」という幽齋の評がある。

542番の和歌の「いぬ」を玉里文庫本が「行」に改めているが、微妙な語感を問題にしているようだ。

544番の和歌には、「似春景と候 面影うかひ候」という幽齋の評がある。『松操和歌集』では、冬歌の巻頭に配されたので、歌題が「初冬のこゝろを」と重々しくされたのであろう。

550番の和歌は、特に評語はないが、幽齋によって二本の線が引かれ、集中第一の和歌と評価されたものである。

929番の和歌の下の句「とけてぬる夜の」は、幽齋によって「まれにこ夜そ」と改められている。『松操和歌集』は、この斧正に従った上で、第五句「あふさかの山」を「相坂のせき」に改めている。これも篤実が、古歌を踏まえて改めたものであろうか。

311番の和歌は、近衛信輔が都城で興行した歌会（「文祿五年七月、信輔帰京ノ時ナルベシ」という書き込みがある）での和歌である。題は「詠松蔭新涼倭歌」で

傷歌の一番目に据えられている。各部の冒頭に二首の和歌を据えられているのは、撰者の川畑篤実（夏歌、雑歌）と日新公（羈旅歌、袖祇歌）の三人である。入集歌数も五番目であり、『松操和歌集』の歌人の中で忠元が高く評価されていたことを物語るものと言えよう。次に、管見の及んだ資料の古い方から紹介して、比較、考察して行きたい。

844番から846番までの和歌は、『新納忠元日記』〔文録三（一五九四）年に上京した時のもの。忠元六十八歳〕の三月の条に、

爰に雨ふり風なとむかひければ 二三日船をと、めけるに 船
子共今日日なをり順風なと、申を聞侍りて 五月三日に船を出
し侍る

別行今はの心細嶋を漕出る舟の行ゑしらねは

（中略）

同四日よのつを出し 嵯峨の関まで十八里とやらん申を 誠
に鳥の飛やうにて着侍る 其夜雨のふりけるに泊りて

旅寝する憂世のさかの関屋にてもりあかす雨に袖しほり
つゝ、

明れは五月五日なれば故郷をおもひやりて

はるかなる旅にしあれば妹こよひひとりあやめをしき忍ふ
らん

（中略）

明れは 夜を籠て備後の国の内 ともと云湊江十里の浪路をし
のきて舟をよせ侍て 其夜はまた船にて明し 雨のしきりなれ
は 雨やとりを求め あけにあかりて一夜明し侍る

舟留る此さとの名のともすれば故郷人のいとこひしき

と出て来る和歌を、連続して採用したものである。比較してみると、『松操和歌集』844番の詞書は、日記の直前の表現に地名を加えたものと言つてよい。この日記を読んで詞書が作られているとすれば、書いたのは篤実ということになるうか。とすれば、「別行」を「わかれての」に改めたのも篤実かと思われる。

845番の詞書の「雨のふりければ」の部分は、もともとあったものなのか、玉里文庫本の書写者鳥津久光が和歌から補ったものなのか、不明である。この和歌でも日記の「にて」が「とて」に改められている。この改訂は、和歌の上の句と下の句の結び付きを強めたものである。

日の詞書は、殆ど日記の文のままと言つて宜い。篤実は日記から一連の和歌を採用したのであったが、玉里文庫本がこの和歌を省いたのは、五月五日が強く出ているという判断もあつたのではなからうか。

846番の詞書は地名を記しただけである（日記には「ともと云湊」とある）。この和歌でも、「いと」を「いと、」に改めている。この改訂も、「ともすれば」への対応に留意したものであろう。

3番、96番、202番、323番、341番、450番、542番、544番、550番、929番の

和歌は、『幽齋点削詠歌』（文録五年三月二十五日とある）に、

立春

音輪山こえくる春のしるしにはこほりうちいつる瀧のしら波

盛花

天津空かけてそかほる玉すたればるのさかりは雲も霞も

更衣

けふみればこれもかへきや若葉そふ花は昨日のころも手の森

六月祓

341 草も木も今朝より秋の立田姫心の色やそめんとすらん

450 いつるよりあらしを空にともなひて雲にはなる、山の端の月

秋の末に草の露を見て

542 草の葉のはかなき露を形見とも思ひをきてや秋は行らむ

初冬のこゝろを

544 江の南さなから春の朝なきにはなの浪よる神無月哉

時雨の心を

550 はれくもる光は空にさたまらて夕日をわたる村時雨哉

君もろこしにわたらせ給ひけるに 老はて、御供につか

うまつる事のかなはさりければ 一首を詠して奉る

718 あちきなや唐土までもおくれしと思ひしことも昔なりけり

御返し 宰相維新公

唐土や大和をかけて心のみかよふ思ひそふかきとはしる

おなし比 月を見て

720 君は行我はうき身のなからへて定なき世の月を見る哉

細島 を舟出するとして

844 わかれての今はの心ほそ島をこき出るふねの行衛しらねは

さかの関 にて雨のふりければ

845 旅ねするうき世のさかの関やとでもり明す雨に袖しほりつ、

五月五日故郷を思ひやりて

H (注四) はるかなる旅にしあれば妹今宵独あやめをしき忍ふらん

ともものうらにて

846 舟とむる此さとの名のともすれば故郷人のいと、恋しき

神前にまうて、

859 うちむかふ宮あのうち月なれや心の水のすめはうつろふ

高原神徳院にて

870 はるかなる驚の高ねの雲と見ん御法の庭の花のけしきは

返し 看淳法印

君ならて心もつけし驚の山雲を御法のはなのいろとは

929 暁の夕告鳥も心あれなまれに今夜そ相坂のせき

山田越前守なくなりし比 御歌を給りけると聞て

1032 うらやまし消にし玉のをはりまてか、る恵の露のことの葉

庄内軍の時 若武者の うたれしなきからを見て

1098 昨日まで誰か手枕に乱れけんよもきか本にか、る黒髪

加藤清正 大勢をもて新納忠元籠りし大口の城をかこま

んとてさまくの、しりあへるを聞て よみて送りける

歌

1202 あたそとて何しに人のにくからんおなしうき世におなし身なれば

君高麗へ渡らせ給ふに 老ほれて御供につかうまつる事の

叶はさりければ 人にたすけられて御船までやうくまか

りて

1203 今こんと別行とも七十の齡の名残おもひやらなん

題しらす

1270 さまくの陰とたのめはふして思ひ起ても君を猶祈る也

1307 時鳥あり明の月の一声に俯きゆるはなも紅葉も

の二十五、六首である。これらの中、544番は冬歌の一番目、1032番も哀

第四章 『松操和歌集』の新納忠元、忠増、久

品の和歌

—その原形から所収形まで—

文政十一（一八二八）年八月に川畑平太左衛門篤実によって編まれた『松操和歌集』には、新納内蔵久品、新納市正久珍、新納四郎右衛門常善、新納武蔵守忠元、新納弥太右衛門忠増の五名の新納姓の人の和歌が収められている（総歌数）（四十六又は四十七首）^{注一}。これらの新納家の人中、忠元の家系に属するのが、久品、忠増である。今回、大口市に関する総合研究に参加させて貰ったので、忠元、忠増、久品についていささか調べる機会を得た。本稿はその成果の一端である。

本論

『松操和歌集』の和歌の収集作業について、篤実は、その序文で、古人文武の道に切磋琢磨の功をつみ人の師表とあふきあるは君の為に野にふし山にふし軍務にいとまなくあるは人しれす孝心にこゝろを尽し終られしはとし寒くして松柏のしほむに後なるをしるのたくひくれ竹の世々に伝て正木のかつらふかくあふかん^な為に^か一二首と拾ひ^首あつめ^首置侍りぬ又は忠孝にか、はらす和歌にこゝろさしふか、りしは市井草莽までも捨す拾ひ集しにおもはず浜の真砂のかすつもりぬるになん^{注二}と述べている。これによれば、『松操和歌集』の和歌は、「いはけなきより和歌を好み道にこゝろさ」した篤実が、個人で、いつの頃か

らか収集したものとということになる。「一二首と拾ひあつめ」というのは、資料から選び出しながら集めたということなのであるか。

それにしても、篤実は実際、どのようなものから集めたのであろうか。又、「なには津浅香山のこの葉のよしあしは冠冕のうへにこそあるへけれ中くやつかれときかする処にあらされは」と述べているが、歌道を一生かけて歩んだ、その力の程も知りたいところである。更に、玉里文庫本と垂城史談会蔵本との表現等の異同は何によるのであろうか。^{注三}

今回調査した新納忠元、忠増、久品の和歌関係の資料を使って、『松操和歌集』の後者の問題にも迫ってみることにしよう。

武蔵守忠元

『松操和歌集』に収められている忠元の和歌（地域研究所叢書の通し番号を付けた）は、

3 音羽山こへくる今朝の春風にこほりうちいつる滝津岩浪^出

花盛を[×]

96 天津空かけてそかほる玉すたれ花の盛は雲もかすみも

花の歌数多よみ侍ける[×]に^う

101 さそな春つれなき老と思ふらんことしも花の跡に残りて

杜更衣

202 今朝見れば是もかへきや若葉さす花はきのふの衣手の杜

松樹新涼^除

311 住吉やにしに秋風松ふけはす、しさよする興津しら浪

六月祓を[×]

323 御祓のみ夏を残して楸生る清き河原に秋風そふく